

・・・ わけあって絶滅しました ・・・

『環境に適応し過ぎたやつ』

・・・・・・・・・・「進化」とか「絶滅」とか大きなテーマから全体を見ると、生き物たちの「営みの面白さ」が見えてくるよね。

金井 絶滅というテーマで興味深いのは、必ずしも小さくて弱い生き物だけが絶滅するのではなく、メガロドンとかメガテリウムみたいな、大きかったり力が強かったりする動物も同じくらい絶滅しているんです。それが個人的にすごい引っ掛かって、絶滅動物自体よりも絶滅した「理由」のほうに着眼点を当てたら面白いんじゃないかと思いました。

—『わけあって絶滅しました。』にはさまざまな絶滅理由が書かれていますが、端的にどういふ動物が絶滅しやすいのでしょうか？

今泉 単純に言うとな「環境に適応し過ぎたやつ」ですね。適応することは大事なんだけど、あまりにも適応し過ぎると、今度は環境変化の影響をもろに受けちゃう。少し気温が変わったり、獲物が少なくなっただけでも致命的になる。

金井 逆に絶滅しにくい、しぶとく生き残るのは？

今泉 「いい加減なやつ」だな (笑)。オポッサムとかね。彼らはどこかひとつの環境に適応しないで原始的な姿のまま生き残ってるんです。能力が特殊化してないから応用が利く。スーツだって、20代の体型にぴったり合わせて作ったら30代には着れなくなるでしょ (笑)。

無駄というのは、ある程度あったほうがいい。・・・・・・・・・・

これは動物に限らず、企業やなんかも皆そうだよね。

今泉忠明 (いまいずみ・ただあき)

動物学者／東京水産大学 (現東京海洋大学) 卒業。国立科学博物館で哺乳類の分類学・生態学を学ぶ。文部省 (現文部科学省) の国際生物学事業計画 (IBP) 調査、環境庁 (現環境省) のイリオモテヤマネコの生態調査等に参加する。上野動物園の動物解説員を経て、東京動物園協会評議員。おもな著書に『野生ネコの百科』(データハウス)、『動物行動学入門』(ナツメ社)、『猫はふしぎ』(イースト・プレス) 等。監修に『さんねんないきもの事典』シリーズ (高橋書店) 等。単独性でひっそり暮らし、厳しい子育てをする、チーターやヒョウ等のネコ科の動物が好き。

オポッサム【opossum】

別名**コモリネズミ**、フクロネズミ。長い尾をもつネズミに似た姿のオポッサム科 *Didelphidae* に属する有袋類の総称。カナダ南東部からアメリカ合衆国東部、メキシコを経て南アメリカのアルゼンチンまで 11 属約 75 種が分布する。北アメリカにすむ唯一の有袋類である。大きさはネズミ大からネコ大の種まである。長い尾は多くの種で根もと近く以外は毛がなく、木の枝などに巻きつき、樹上での動きを助ける。四肢は短く、5 指を有し、後足の親指にはつめがなく対向性で、枝を握るのに適する。

まずは、よく見れば意外と可愛いという点です。例えば、子どもを背中に載せているママオポッサムをご覧ください。



10 匹の子どもでも頑張って背中に載せてあげるオポッサムは、とても可愛らしいと思いませんか？

その子オポッサムもかわいいところが十分あります。



しっぽで枝を捕まえる子オポッサム



びっくりして声を出す子オポッサムの顔がまるで笑っているかのよう



赤ちゃんを乗せたキタオポッサム (*Didelphis virginiana*)

Photographed in Lincoln, Nebraska

Photograph by Joel Sartore, National Geographic Photo Ark